

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 文学部 国文学科

課題：古文・漢文を含む専門に関する筆記試験および小論文

時間：90分

□ 以下の文章は、出口顯『声と文字の人類学』の一節を抜き出したものである。これを読んで、以下の問に答えよ。

音声である言葉は、話されるや否や音としては消えてなくなる。しかし文字という形で記されることで、それは石や金属、羊皮紙や紙の表面に、物質としてとどまることになる。グディが特に考慮しているのはアルファベットの使用例であるが、文字を書くそして読むということは、口頭でのコミュニケーションに半永久的な形態をもたらすことになった。人間の脳(思考・記憶)の中ではなく、外部にコミュニケーション(言葉)を具体的なものとして定着させる。それはつまり記録としてメッセージの内容が安定するということ、つまり変幻自在ではなくなるということである。これによって、書き記されている言葉や話題・議論の内容を、くわしくギンミ¹してみることが可能になる。読み書きによって、人間のコミュニケーションを長期にわたり保存し、こまかく調べることができるようになったのである。「書く¹ということが口頭による言語の流れをせきとめることによって、違う時に違う場所で言われたことをひとつひとつ比べることができるようになる」のである。

話されては消えていく音声のメッセージを記憶のみを頼りにして議論していた場合とは異なり、書くことによって、物質の形で残ったものという確かな手がかりを介して検討していくこと、それが批評の余地を拡大させたのは、口承性の場合とは別の形で論議が人々の目の前に展開されることになったからである。それと同時に知識の蓄積、ことに抽象的な種類の知識を蓄積する可能性も増した。書くことは、記憶に頼り音声で伝承していくという情報の貯えの体系を変えた。それにより、コミュニケーションの性質を、対面関係における限定的な場面のものからさらに広い範囲のものへと変えることになったのである。書くことには二つの主要な機能がある。一つは貯蔵の機能であり、もう一つは脱脈絡化による文章の組み直しや検討である。

蓄積について、例えば古代メソポタミア文明は、食料の生産・保管・分配、各地域から国家に税として送られる貢納品などについての記録を膨大な文書として残し、経済活動を国家が独占・管理するのに資するようにしたのである。

² 一方脱脈絡化という、コミュニケーションをそれが成立した場面から解き放つことによって、それを組み直したり検討することは、批判的活動の領域を拡大し、それとともに合理性や懐疑主義や論理の精緻化をもたらした。

むしろ、既存のものにとつてかわりうるものが示される形式が、人にその違いを気付かせ、そこにある矛盾につ

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 文学部 国文学科

いて考えるように強制し、論議の「規則」について意識させ、またそうした「論理」を是が非でも発展させるようにしてしまおう、といったほうがよい。「中略」なぜか。つまり、言われたことが文字に移されるとき、それは細部にわたって点検され、それが全体についても部分についても、前とのつながりについても後るとのつながりについても、またその脈絡においても脈絡を離れたものとしても、検討することができるからである。言いかえればそれは、話し言葉だけによるコミュニケーションには求めることができないような、まったく異なったタイプの検討や批評を受けるのである。言葉はもはや一つの「場面」にしばられてはいない。それは時を越えたものになる。

例えばメソポタミアでは医療が発達していたが、それも文字の効用の例として考えることができる。グデイは言う。その発達には病気の症状が治療に関するテキストの中で整理され体系的に配列されることによって可能になった。

研究成果は書き写されただけでなく、何度も編集しなおされた。実際これらは書庫の中でももつとも変転のはげしい書物だったかも知れない。文字板の多くは処方書のみからなり、また症状や前兆をリストしたのもあったが、それらは時につれて追加されたり変えられたりしていった。人間の病苦をとりのぞくための一連の行為を集積し、書き記し、算定し、増やしてゆくというこの漸進的プロセスは明らかに、口語文化における病気のシンダ^インや治療と連続的なものである。けれども知識の体系化は、読み書きのできる医者を養成する活動が増えるに伴い、「現代科学」「合理的医療」「論理＝経験的活動」などさまざまに呼ばれているものに向けての大きな一歩が踏み出されたことを意味している。

こうして単なる話し言葉から書かれた言葉への移行によって、大まかに意識の変化とも呼びうるような種類の重要な発展、そして部分的には、図表やリストによる形式的操作を大きく拡張することから生じた重要な発展が導かれると、グデイは考えている。

読み書き能力あるいはリテラシーを、人は、書物を書く、小説などの文学作品を味読する力のことと思いがちである。「書物を正統視する」意識がそこにはある。手紙を書く・新聞を読むこともそこに含めてよいかもしれない。しかしそれがリテラシーのすべてではない。例えばスーパー³で購入するものをメモ帳に列挙するというリストづくりを考えてみよう。これも立派な読み書き能力の駆使である。しかも買い物リストにはある重要な特徴がある。

買物リストは個人や集団の未来の予定表、また家計の要求するものに関する行動の時と場所を決める予定表を組

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 文学部、国文学科

み立てるひとつの方法である。「中略」青物屋で買う品物はひとまとめにし、それらを隣りのパン屋で買う物の次に書くことができる。こうして買い物リストはかなり正確な未来の行動を表わすように作ることもできるのである。「中略」これらは「中略」「計画」であり、しかも全体をまとめあげるメカニズムが具体化することによっていつそう決定的で永続的、かつより包括的で形式的になる計画なのである。

つまり買い物リストは、今後の予定を立て、それに向かって自らの行動を組み立てようとする計画、すなわち意志を可視化するものなのである。

しかしそれだけではない。リストには、音声のみのコミュニケーションの場合（以下「口承性」という）とは異なる意識の変化がみられるのである。

リストは話し言葉を直接的に表わすことはしない。むしろそれは会話とか演説といった普通の話し言葉形式に見られる連続性や流れやつながりといったものの対極に位置しており、それらを放棄するかわりにひとつの配列方法を採用して、（ほとんど）つねに話し言葉が発せられる場である広範な脈絡から概念や言葉の項目を切り離すばかりでなく、たとえば牛、五頭、ロバ、一四頭、土地、五ドウナムス、椅子、八脚、テーブル、二卓などといった財産目録に見られるように、各項それぞれを互いに切り離すのである。

それは物理的な位置づけ、場所というものに依存している。またそれは異なった方向から、つまり横にも縦にも、上からでも下からでも右からでも左からでも読むことができる。そしてそれは明確な始まりと終わり、つまり布きれのようにひとつの境界、縁をもっている。最も重要な⁴はそれが、数や最初の音やカテゴリーなどによって各項を整理秩序づけることを促進することである。そしてこの、外にも内にも境界をもつということが、カテゴリリーを非常に見やすいものにし、同時にそれをいつそう抽象的なものにしていくのである。

このようなリストは古代メソポタミアでは、行政管理の手段であった。収入においては貢納の受領証や戦利品のメ^イサイシヨ、支出という点では配給物の分配や役人の給与などという形をとった。取引を記録することは、メソポタミアでは官僚制のスムーズな運用という点でとりわけ重要なものであった。リストという形での「文字の存在が、経済を組織している国家と共に経済の発展をうながし、促進するものであったことは明らかである」。官僚制は、文字によるコミュニケーションすなわち文書の通達によって行政の意志を社会の末端まで行き渡らせようとする仕組みであるが、リストによる事務処理と深く結びついているのである。「文字によるコミュニケーションの様式をとり入れ

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 文学部 国文学科

ることが、より広い範囲の、没個性的で、いつそう抽象的な政治体系の発展に欠かせないものであったことは明らかである」。

注 グデイ…ケンブリッジ大学の社会人類学科主任教授。一九一九～二〇一五。

問一 傍線部1のように筆者が述べるが、それでは、話された「音声である言葉」は、どのような特徴を持つか。傍

線部1と対比する形で説明せよ。

問二 傍線部2のように筆者が述べるのはなぜか。その理由を説明せよ。

問三 傍線部3のように筆者が述べるのはなぜか。その理由を説明せよ。

問四 傍線部4のように筆者が述べるのはなぜか。二重傍線部の「官僚制」とも関連つけて、その理由を説明せよ。

問五 波線部ア～ウの片仮名を漢字で書け。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 文学部 国文学科

小論文

問題□の文章も踏まえながら、文字言語の持つ長所と短所について、具体例を挙げながら論ぜよ。
(六百字程度)

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 文学部 ドイツ文学科

課題：小論文（与えられた日本語テキストをふまえて、自らの
考えを論理的に展開・表現できるかをはかる）

時間：90分

以下の文章の内容を踏まえて、異文化との接し方について、あなたの考えを六〇〇字〜八〇〇字にまとめて述べなさい。

これはイギリスの社会人類学者アダム・クーパーの『カルチャー』という本に出てくる話ですが、ラトガース大学のモファート教授の報告によると、教授が自分の教室で、大学で同じ寮に住む白人系と黒人系の学生の間で議論をさせると、生物学的特徴から人種について語ることは拒否するのですが、文化の違いについてはそれぞれの立場から堂々と意見を述べるそうです。文化の差異を論ずることは今日的な話題であり、政治的にも正しいことと考えられているとのこと。

ただ、相手の文化と違う点を確認し合うこと自体は決して悪いことではありません。逆に面白く楽しいことにもなります。外国人どうしが出会えば、「文化の違い」は格好の話題になることも事実でしょう。私自身、いつも経験していることでもあります。そうした認め合いですればよいのですが、自分の文化を主張することが相手の文化との差異を強調することになり、そこに差別が起こる場合があるのです。

たとえばアメリカ社会でも日本社会でも、自分たちのグループや仲間の中にイスラム教徒がいれば、パーティや食事をして、アルコールは出さない、豚肉は使わない、といった心遣いが必要です。そんなことは面倒くさいと思う人もいるかもしれませんが、しかし、少なくとも文化の違いが相手がいるときには、必要な異文化への配慮を欠くと、相手はいい気持ちになりませんし、侮辱されたと感じることもあるでしょう。日常生活におけるささいな違いが排除につながってしまう、つまり多教徒と少数教徒が交わり合っている社会では、相手を斥ける形で文化の違いが強調されることが起こります。

匂いといったものをもってみても、それが文化の特性にされてしまうときのことを考えてみましょう。ある文化圏の人にとっては何でもない匂いを、別の文化に属する人はがまんできないことがあります。外国人が嫌いだというときに「あの匂いがたまらない」ということもあります。私などが小さいころには「外人」（白人のこと）は体臭が強くて近くに行くと大変だ、といった話が日常的に言われました。食べ物についてもそのような話は多くあります。私の体験でも、一年間外国へ行って家を空ける友人が、誰かその間住む人はいないかと言うので、あるアジアの国から訪れた人を紹介して滞在してもらったのですが、一年経って外国の方が帰り、友人が戻ったところ、料理の匂いや「外国人」の体臭が部屋や家具についてしまっていて困った、もう絶対に泊めたくない、という話をされました。単に好意から紹介しただ

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 文学部 ドイツ文学科

けなのに、ずいぶん「文化の違い」で嫌な思いをしました。

文化の違いが、日常生活の些末なところに表れて、「好きな人もいれば嫌いな人もいる」といった程度で終わればいいのですが、そこは簡単ではありません。差別の対象にされることがあるわけです。(…)

よく「文化的アイデンティティ」ということが言われます。自分の育ったところとは文化的に異なる社会の中に自分を置いて生活しなければならぬとき、たとえば、移民や難民、留学、仕事での駐在といった現代でよく見られる場合に、いろいろな形で異文化に適應することが必要となります。守るべきルールのはっきりした学校や仕事場などではスムーズに適應できるかもしれませんが、信号をどう渡るか、お店でどう買い物するかといった、社会的通念にもづくことにも慣れていくことができます。しかし、異文化の社会の中でどうふるまうかは、慣れるにしたがって自分でもできることがある一方、やはりできないことが出てきます。文化に屬することは、その社会で「自明」と思われるところが多いので、他所から移ってきた人間には、なかなかわからないことが多いのです。

たとえばキリスト教圏では、金曜は肉でなく魚を食べるという習慣を守ることが信仰上は当然と考えられています。日本の自宅に金曜日の夜にキリスト教徒のお客さんを招待して、肉料理を出してしまう、といったことは起こるものです。特に「肉食文化」圏からのお客さんの場合にはそうです。私もおいしい肉料理を出せば喜んでくれると思って、つい金曜日の夜に出してしまったことがあります。多くのあまり宗教的でない今日の人たちの間では特に気にしないで肉料理を食べて平気な場合がありますが、そう思っていると、案外気にして「控える」というアメリカ人やヨーロッパ人に出会います。(…)

過度に自分の文化を主張することは相手を傷つけます。また、自文化のアイデンティティを強く主張すると、自文化中心主義と受け取られることがあります。これは文化の差異にもとづく人種差別主義の傾向を助長することにもなりますが、文化の違いで多数民の支配する社会では、逆に少数民は自分の存在をかけても自文化のアイデンティティを主張しなくてはならないことがあります。文化のアイデンティティをどうする場合に、誰がどのような形で主張するか。これは容易な問題ではないのです。自文化に誇りを持つこと自体はよいことにはちがいませんが、多民族・多文化社会においては、自文化への誇りをどういうふうに表示するかという微妙な問題があることも忘れてはならないでしょう。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 文学部 ドイツ文学科

出典 青木保『多文化世界』（岩波書店 二〇〇三年 四二～四八頁）「一部改変」

お互いに自分の文化を主張し合うことは、実は大切なことです。異文化を持った他者と日々出会う社会こそが現代社会なのですから、少しでも相手に自分の背景を知ってもらうことは必要ですし、また相手の文化的背景を理解することも重要です。しかし、異文化を背景にする多くの人たちが行き交い、混じり合うところでは、実は「文化」は大変デリケートな問題となることもよく認識すべきだと思います。このことは現代を生きる「常識」として強く認識する必要があります。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 文学部 フランス文学科

課題： 英文または仏文和訳とその内容に関する日本語による小論文
時間：90分

次の文章を読んで、下の問に答えなさい。

The identical story is not the same story to all who hear it. Each will enter it at a slightly different point, since no two experiences are exactly alike; he will replay it in his own way, and transfuse it with his own feelings. Sometimes an artist of compelling skill will force us to enter into lives altogether unlike our own, lives that seem at first sight dull*, repulsive**, or eccentric. But that is rare. In almost every story that catches our attention we become a character and act out the role with a pantomime of our own. The pantomime may be subtle or gross, may be sympathetic to the story, or only crudely analogous; but it will consist of those feelings which are aroused by our conception of the role. And so, the original theme as it circulates, is stressed, twisted, and embroidered by all the minds through which it goes. It is as if a play of Shakespeare's were rewritten each time it is performed with all the changes of emphasis and meaning that the actors and audience inspired.

* dull : つまらない、退屈な
** repulsive : おぞましい、不快な

(Walter Lippmann, *Public opinion*, BN publishing, 2007, p. 137. 一部改変)

1. 全文を日本語に訳しなさい。ただし、出典は訳さなくてよい。
2. 下線部に示された筆者の意見について、自分の考えを日本語 600～800 字で述べなさい。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 文学部 フランス文学科

課題：英文または**仏文和訳**とその内容に関する日本語による小論文
時間：90分

次の文章を読んで、下の問に答えなさい。

Pourquoi la sagesse est-elle nécessaire ? A-t-on besoin de la sagesse ? La tradition répond que oui, mais qu'est-ce qui nous prouve qu'elle a raison ? Notre malheur. Notre insatisfaction. Notre angoisse. Pourquoi la sagesse est-elle nécessaire ? Parce que nous ne sommes pas heureux.

Mais si nous ne sommes pas heureux, ce n'est pas toujours parce que tout va mal. Il arrive aussi, et plus souvent, que nous ne soyons pas heureux alors même que tout va à peu près bien, au moins pour nous. Je pense à tous ces moments où l'on se dit « j'ai tout pour être heureux ». Seulement, vous l'avez remarqué aussi bien que moi, il ne suffit pas d'avoir tout pour être heureux... pour l'être en effet. Qu'est-ce qui nous manque pour être heureux, quand on a tout pour l'être et qu'on ne l'est pas ? Il nous manque la sagesse.

(André Comte-Sponville, *Le bonheur désespérément*, Éditions Pleins feux, 2000, pp. 17-19. 一部改変)

- (1) 全文を日本語に訳しなさい。ただし、出典は訳さなくてよい。
- (2) 下線部に示された筆者の意見について、自分の考えを日本語 600～800 字で述べなさい。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 総合人間科学部 教育学科

課題：教育学の学修に必要な基礎学力の試験

時間：90分

次の文章を読み、以下の問いに答えなさい。

教育の目的に関する問いは教育の改善や効果に関するいかなる議論とも不可分ではあるが、しかしだからと言って、教育の（諸）目的に関する議論を様々なイデオロギー的立場の言語化にのみ基づいて考えるべきだとも思わない。別の場所で詳しく論じたように（Biesta 2010f）、何がよい教育か（何が効果的かではなく）ということに関わる議論でもっと明確にすべきことがあるはずである。そのためには、教育が単独の目的やいくつかの目的の組み合わせとの関係でのみ機能することは決してなく、教育的行為は常に多くの様々な領域の教育目的との関係で作用するということを認識する必要がある。ここでの問題のポイントを理解する方法の一つは、学校教育が実際にどのような領域に影響を持っているのかをまず検討することである。この点に関して、私はこれまでも、教育の機能が現れやすい3領域を区別することは可能だということを述べてきた。1つは、「資格化 (qualification)」の領域である。これは、教育を通じて、生徒が知識や技能、特定の物事を遂行するのにふさわしい態度をどう身につけるかに関わる問題である。そしてこの場合の「遂行すること」には、例えば数学的操作を行う能力や実践的スキルを遂行する能力のように特定のかつ限定的なものもあるし、複雑な多文化社会をうまく舵取りする能力のような非常に幅の広いものでもあり得る。

第2は、「社会化 (socialization)」の領域である。これは、教育を通じて、既存の伝統や文化、存在・行動様式の一部になることと、そういったものへの指向性を獲得させるものである。この領域においては、例えば教育が、意図的なものであれば目的が「隠れた」ものであれ、特定の社会的・文化的ありようとアイデンティティをどのように再生産するのかという問題が考察の対象となる。こうした問題こそ時に教育がねらいと

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 総合人間科学部 教育学科

するものであり、時に教育の現実的な機能の仕方だからである。しかし、職業的な社会化、すなわち、学生を特定の専門職コミュニティの有能な一員にしようとする意図的な試みは、これとはまた別の例であり、ある種の宗教教育や道徳教育の形式と似たところがある。教育が機能するこの2領域に加えて、私がこれまでに提案してきたのは、教育というものが常に個人に影響を与えるという側面である。学生を既存の構造や慣習に依存させるようにすることもあるし、そのような構造や慣習から独立させる意図を持っている場合もある。後者は、教育を解放の過程に結びつける考え方に連なる考え方である。

資格化と社会化、そして私が「主体化 (subjectification)」と呼ぶところの、人間を主体化していく過程、この3つを教育が有するそれぞれ別個の3機能とみなすことができる。この3つは、全てではないにしてもほとんどの教育が果たしている役割と影響がどのようなものなのかを示しているのである。その一方、資格化・社会化・主体化は、教育の3つの目的になりうるものと見ることもできるし、また、その3つのいずれかに関してなすべき重要な選択が存在すると認めるために、これらを教育目的の3領域と見ることも可能である。このような形で教育の目的に関する問いを考えるためには、少なくとも議論をより精緻なものにする必要があるが、本章固有のフォーカスに対しては、教育の目的に関する問いをこのような視点から検討することには別の重要な利点がある。その利点とは、教育目的の3領域がそれぞれに異なる方向に教育を牽引することになるという事実から生じる。言い換えれば、3つの領域の間に完全な相乗効果は存在せず、むしろ緊張とコンフリクトの余地が生まれるのだ。例えば、競争は資格化の領域では学習を駆動する望ましい「原動力」かもしれない（例えば、競争的な環境に置かれたほうが学生はより多くを達成するであろう）が、社会化の領域においては（例えば、もし協同的態度を育てたいと望むのであれば）必ずしも望ましい価値というわけではない。同様に、主体化の領域においても、もし例えば「ホモ・エコノミクス」ではなく、「ホモ・デモクラティクス」を養成したいのであれば、競争的な環境がそのまま望ましい方向性となるわけではない。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 総合人間科学部 教育学科

私は、教育目的は多次元的な特性をもち、教育は多くの様々な「領域」に関連するものだという事実が、教育という実践に特有のものだと考えたいのである。単一の目的によって構成され枠づけられる、人間による他の様々な実践、例えば健康（の促進）という医療の目的や正義（の推進）という法制度の目的などとは異なり、教育の目的の多次元の特性が意味するのは、教育が促進しようとする異なる「関心」の間にどう均衡を図るかの判断の必要性が常に存在するということであり、多くの場合それは「トレード・オフ」の問題になるということだ。つまり、他の領域に関する特定の達成を推進するためにある領域についてどの程度「妥協する」つもりがあるかということ、例えば、資格化の領域における達成を少しでも減らせば、主体化の領域でより多くの達成が得られるという具合である。

出典：ガート・ピースタ（2024）『よい教育研究とはなにか』明石書店、41－43 頁

- 問1 本文の内容を 400 字程度で要約しなさい。
問2 本文の内容について、あなたの考えを 400 字程度で述べなさい。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 総合人間科学部 心理学科

課題：課題文に関する論述試験

時間：90分

【一】 次の文章を読んで、後の質問に答えなさい。

なぜ人間だけに白目があるのか

人類が持つ大きな特徴として、白目が挙げられる。

相手の目の微細な動きから、他人の気持ちを推測できるのは、白目があるからだ。白目によって、黒目の向いている方向がわかり、相手がどこを見ているかがすぐわかる。人間だけが持っている能力、視線共有である。人間以外の霊長類で、こうした白目を持つているサルや類人猿はいない。類人猿も少し離れた相手とコミュニケーションをとる場合もあるが、白目を使うようには進化しなかった。

相手が見ている方向や対象には、何らかの意図が含まれているケースが多い。つまりそこには、相手の関心を引く何かがあるということだ。それは美味しい果実だったり、危険な外敵だったり、あるいは交尾の相手だったりする。その気持ちを仲間が瞬時に理解できるからこそ、集団的な行動が可能になる。

ここで間違えてはいけないのは、白目によって私たちは、相手の「考え」を読んでいるのではなく、相手の「気持ち」を読んでいる点だ。考えを読むのは「セオリー・オブ・マインド」といって、認知の向上が伴わなければできない行為だ。人類は言葉の獲得によってその能力を格段に高めた。しかし相手の気持ちを読むのはそれよりずっと前に進化した能力だろう。その結果、相手と一体化し、お互いの壁を乗り越えて行動を共にできるようになったのだ。

白目は A をもたらして、相手の気持ちの読み解きに貢献し、共感力を高めるために使われている。白目は軟部組織のために化石としては残らず、いつ人類に現れたのか、正確にはわからない。だがゴリラやチンパンジーに白目がないことから、共通祖先から分かれたあとに現れた、人間だけの特徴だと考えられる。しかも世界中の人間がこの白目を

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 総合人間科学部 心理学科

持っていることから、ホモ・サピエンスが世界中に広がる前に、この白目が現れたと考えられる。共感力を高めながら、同時に人類の身体的特徴も変わっていったのだろう。

また、人間は簡単に真似する能力を持っている。悪口として「サル真似」という言葉があるが、サルに見たまま真似をする能力はない。人間は、頭の中であれこれ考えなくても、見たものをすぐに真似できる。それは相手の身体と自分の身体を即座に共鳴させられるからだ。つまり、すぐ相手の立場に立てるのだ。相手の立場に立つというのは、相手の身体を乗っ取るようなイメージに近い。真似は、人間だけに備わったとても優れた能力なのである。

なぜ共感力は悲劇をもたらしたのか

ここまで見てきたように、人類は何万年もかけて、共感力を育て上げてきた。

小規模な社会で共感力は発達し、大きな社会を構築していく上で、巨大な力を発揮した。だが、共感力は大きな効用とともに残酷な悲劇^①をもたらした。その能力は方向を間違え、戦争のような取り返しのできない事態を招いてしまった。

人類の間違いのとは、言葉の獲得と、農耕牧畜による食料生産と定住にある。

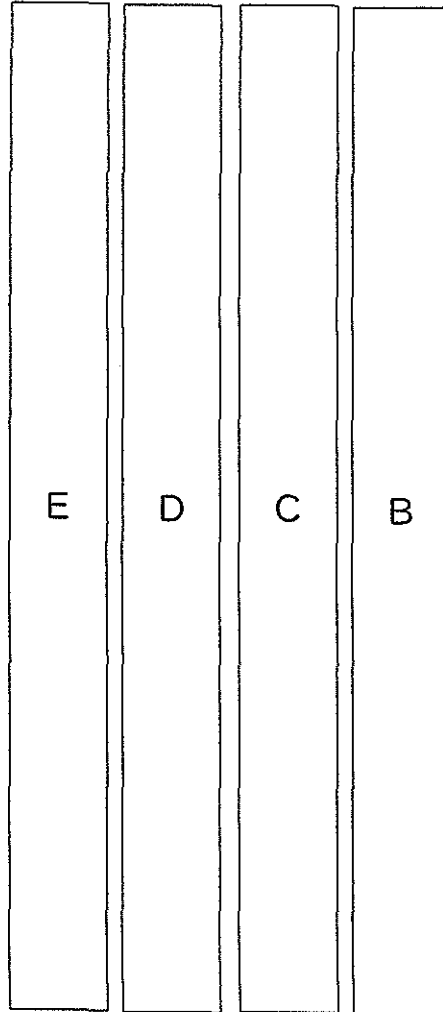
長い間、人類は個人の所有という概念を持っていなかったし、定住もしていなかった。

狩猟採集時代の頃の人類は、一五〇人ぐらいの集団で共感力を使って仲良く生きていた。しかも自然は全て共有財で、土地は誰のものでもなく、誰が使ってもいい共有地だったから、集団間の争いは生まれにくかった。

しかし、農耕牧畜というシステムはそうではない。狩猟採集と農耕牧畜の大きな違いは時間の概念だ。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 総合人間科学部 心理学科

農耕牧畜は、定住して雑草をはらい、種を蒔き、芽が出て、その実を収穫するまでに時間がかかる。しかも収穫物を監視しなくてはいけない。定住する必要が生まれたことによつて、土地に価値が生じるようになる。もちろん土地もどこも同じではなく、肥沃な土地と荒れた土地では価値の違いが生じる。どこも似たような「ただの土地」だったのに、「いい土地」と「悪い土地」という違いができたのだ。



農耕牧畜が抱える本質的な失敗

格差社会となった現代では、平等を求める声が世界的に広がっている。しかし平等な社会は、狩猟採集社会の時代に、すでに実現していたのだ。

しかし、その後の農耕牧畜によつて、土地による価値の違いができてしまい、領土ができてしまった。その領土も最初はなかなか定着しなかったが、技術が発展して食料が蓄積できるようになると、余剰人口を養えるようになる。余剰の人員がいれば、たとえ誰かがいなくなっても、その代わりはいくらでも見つかるわけだ。そのうち分業制になり、食料生産以外の活動に従事する人々が増えてくる。道具をつくったり、家をつくったり、あるいは服をつくったりする専門職ができる。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 総合人間科学部 心理学科

さらに、人口が増えれば居住する場所を確保するために、領土を拡張しなくてはならなくなる。領土を拡張しようとする中で、先に目的の土地に人が住んでいる場合は、その集団を押しつけなければならぬので、武力が必要になる。そうやって農業社会は、だんだんと首長制をとるようになり、やがて君主制の国家になっていく。そしてここでも格差が生まれてしまう。所有を認める社会だから、権威者に食料や所有物が集まり、それを権威者の意向によって分配する社会が生まれる。その頃から、現代にも通じる悲劇が始まっているのだ。

共感力は、小規模な社会の場合、集団の内外に関係なく、お互いが助け合い、協力し合うことに役立つていた。ところが農耕牧畜で領土が生まれ、ずっとその中で暮らしていると、領土内に住む人々の間でしか共感が通じなくなる。さらに人数が増え、領土を広げようとなった際には、武力行使が必要だと考えるようになる。

共通の敵づくりに役に立ったのが言葉だ。言葉はアナロジーで、同じ人間なのに「こいつはキツネのようにずるいやつだ」とか、「コウモリのように卑怯なやつだ」という言い方をして、同じ人間であるはずの相手を、人間ではない生き物や、危険な外敵に仕立て上げることができる。戦時中の日本ではアメリカやイギリスを「鬼畜米英」と呼び、敵視した。そうすると、あいつなら殺してもいいとか、捕らえてもいい、奴隷にしてもいいという発想につながってしまう。社会を拡大し、争う相手を言葉で定義する人間による悲劇は、この頃から始まったのだ。

資本主義が生んだ悲劇

中東とヨーロッパの社会は、**F** だけではなくて **G** 社会でもある。キリスト教は **F** と **G** の宗教だ。人間は **H** を使って自分たちだけでは耕せないような土地を開墾し、自分たちでは運べないような重たい荷物を運ばせた。そして、人間が食べられないような草

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 総合人間科学部 心理学科

を食べさせて、Hの肉もお乳も皮も利用した。

西洋には人間とHの差別化が早い時期からあったとされている。その結果、人間をHと同じように扱う発想が出てきて、実際に奴隷が生まれてしまった。ギリシャ時代も、一般市民はわずかな人数で、そのわずかな市民を大勢の奴隷たちが支えていた。もちろん、エジプトなど西洋以外でも奴隷はいたが、この奴隷制は人類の大きな間違いだった。

しかし、人類には中南米や日本のようにHをあまり持たない文明もある。日本では、Hもいたが、肉もお乳も利用してこなかった。主に運搬用、あるいはF用に利用してきただけで、広大な牧場を経営することもなかった。日本の東北地方では、人間と同じ家の中で馬を飼っていたし、西洋と比べれば、Hと人間の差別化をほとんどしてこなかったといえる。

食料を生産するという意味で、農耕牧畜は最初の大きな役割を果たした。

季節の移り変わりに従って収穫を管理しようとする、まず農事暦ができる。一年を農耕の計画に合わせて区切り、計画通りにノルマをこなして安定した食料生産をしようとする。だから時間に合わせて人間の行動を区切り、機械的に働かせようとする。同じ人間の中にも格差をつくって、上級社会の支配層と下級社会の労働層ができる。

そのような仕組みを徹底したのが産業革命である。産業革命は、さらに自然の時間から工業的な時間を切り離して、生産工程を時間で計算し、その時間の中で人間をあてはめて管理した。そうして大都市が生まれていった。それまでの都市は、自然の営みと無関係にはつくられていなかった。ところが、近代、現代の大都市は自然と全く関係なくつくられている。工業都市は人工的な時間の流れと、管理された人間の労働力によって成り立っており、そこから都市と自然との遊離が始まったのだ。しかも人間をシステムの管理する政治体制も生まれてしまう。現在の資本主義の失敗につながる大きな悲劇である。

音楽と言葉の合体

先に述べたダンバーによれば、現代人の脳の大きさは、一五〇人ぐらいの集団サイズに適したものだという。現代人が登場する二〇〜三〇万年前には、脳はもうこの大きさになっていた。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 総合人間科学部 心理学科

興味深いことに、現代でも食料生産をせずに自然の恵みだけに頼って暮らしている狩猟採集民の村の平均サイズは一五〇人だという。ということは、七万年前に言葉が登場して、一万年前に農耕牧畜という食料生産が始まるまでの期間も、人間は一五〇人を単位として狩猟採集生活を送っていたと想像できる。

この一五〇人という数は、社会関係資本（ソーシャル・キャピタル）であると私は思う。何かトラブルに陥ったときに相談できる相手の数である。それは単に名前の羅列として記憶しているような関係性ではなく、過去に喜怒哀楽を共にしたり、スポーツや音楽などの共同活動を通して身体を共鳴させたりした仲間であり、それぞれの性格や価値観をある程度知っている間柄である。

意外なことに、この適正な集団数は、現代のようにネットを通じて人と人とが容易に接続できる時代になっても拡大してはいない。

私たち人間が持つ共感力は、これまで見てきたように、言葉が登場する以前に、音楽的コミュニケーションによって基礎がつけられた。言葉は世界を分かち、それぞれに興味を与え、仲間内で共有できる物語をもたらし、それは現代人であるホモ・サピエンスがアフリカ大陸を出て、地球のいたるところに進出する結果をもたらした。しかし、言葉はメリットもある一方で、人間同士の争いを激化させる結果も招いてしまった。

言葉は世界を分類する。ときに違うものの中に共通の要素を見出したり、同じはずのものを分けたりする。人間以外の霊長類も、同じ群れで暮らす仲間に共感し、外部の仲間と

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 総合人間科学部 心理学科

敵対する傾向はある。しかし、同じ種であれば、敵にも仲間にもなる存在だから、敵視し
たとしても、集団で大規模に殺し合うようなことはない。

しかし、言葉は人間の持つ攻撃性を高めてしまった。

社会の共感力を維持するには、それぞれが身体を共鳴させて心をついにし、絆を強める
必要がある。それが途絶えたり、マンネリ化したりすれば、仲間を思いやる気持ちが低下
してしまう。そんなとき、共感力を高めるために共通の敵がつけられる。みんなの目が敵
に注がれ、一斉に団結して排除しようとするので仲間意識が高まるのだ。そんなときに
多用されるのが、音楽に歌詞を付けて合唱することである。

音楽によって互いの壁を乗り越えて連携しようとする心に、言葉によって目的意識が付
与され強化される。これまでの戦争を振り返っても、必ずといっていいほど軍歌がつくら
れ、合唱されてきたのはそのためだ。音楽と言葉の合体によって、人間がいかに理不尽な
暴力に突き進んでしまうかを示している。

音楽的コミュニケーションは宗教にもみられる。

宗教は、それぞれに存在する小規模なコミュニティをつなぐ接着剤となった。キリスト
教は各々の土地に根付いた文化をつなぎ、大集団になったし、イスラム教も同じ道を歩ん
だ。

宗教は音楽を多用するし、ほぼすべての宗教に音楽がある。神という目に見えない存在
を前提にして、言葉という虚構によって違う文化をつなぎ、共通の目標にした。宗教は国
家を成立させる前に、あるいは集団を大規模にする前に、文化をつなぐ役割を果たしてき
た。元々、二足歩行から発達していった音楽は、人類を思いがけない方向へと導いたので
ある。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 総合人間科学部 心理学科

問一 本文中の空欄Aにあてはまる最も適切な語句を本文中から五文字以内で抜き出さない。

問二 本文中の空欄BからEに、下記文章下記文章(1)から(4)をあてはめるとき、もっともふさわしい順序になるように並べ替えなさい。

(1) しかし農耕民は、土地に執着し続けるから、天変地異が起こって全てを失っても、そこに居続けようとする。気候が人々の暮らしを大きく左右する。だから人類は極端な人口の減少と増大に悩まされることになった。

(2) 当然ながら個人の能力に差はあるが、そこで所有を認めたら、たくさんの獲物を所有する人に権威が集中してしまう。それをできるだけ解消するために、誰も所有をできないようにした。たとえ誰かが多く食料を獲得したとしても、分配する理由を見つけ出そうとするように、常に平等な社会を守ってきたのだ。

(3) 最初の頃、農耕牧畜は、大変過酷な作業だった。狩猟採集は一日に二時間か三時間ほど働くだけで必要な食料を手に入れられたし、その土地に食料がなくなれば移住していた。現代の狩猟採集民もそういう生活をしている。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 総合人間科学部 心理学科

問三

本文中の空欄 F・G・H にそれぞれあてはまる語句として、最も適切なものを下記の語群から一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- (1) 家畜
- (2) 食料
- (3) 牧畜
- (4) 狩猟
- (5) 権威
- (6) 農耕

(4) もちろん農耕にもメリットはある。次第に農耕技術は発達し、食料の蓄積ができるようになっていく。農耕のいいところは、誰もが従事できるところだ。狩猟採集ではエキスパートがそれぞれの能力を駆使して多様な食料を集める。そこには個人的な差異が生まれるが、できるだけ差異が生じないように、平等を原則として、権威をつくらない仕組みが狩猟採集社会にはあった。長い歴史の中で、平等を守るための慣習が張り巡らされているのだ。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 総合人間科学部 心理学科

問四

下記の文章を読んで、本文中に記されている著者の主張と一致しているものをすべて選び、その番号を記しなさい。ただし、本文中の記載だけからは、著者の主張と一致しているかどうかの判断がつかないものについては、「一致」に含めないとする。また、一致する文章が一つもない場合には、〇と記載すること。

- (1) 農耕牧畜は、土地による価値の違いを生んだ。
- (2) 人間は、まず相手の考えを読み取る力を高めたことで、共感能力を獲得する基礎を確立した。
- (3) 人類にとっての適正集団数を超えると、共感能力は発揮されない。
- (4) 狩猟社会は、狩りの得手不得手を明らかにするために、格差社会の引き金となった。
- (5) 人類が定住するようになったことと宗教との間には、密接なつながりがある。
- (6) 産業革命は、社会格差に対する問題意識から生まれたといえる側面を持つ。

問五

傍線①「悲劇」について、著者はこの「悲劇」として具体的にどのようなものを考えているのかだろうか。また、なぜ悲劇がもたらされると考えているのだろうか。二五〇文字以上三五〇文字以内で、著者の主張をまとめて説明しなさい（ただし、文字数に句読点を含む）。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 総合人間科学部 心理学科

【二】 次の文章を読んで、後の質問に答えなさい。

第3章 数字が支配する世界

1 私たちに身近な数字と競争

フィンランドの公教育

私たちは子どもの頃から点数にもとづいて競争を強いられている。ペーパーテストの成績を基準とした「良い学校」とそうでない学校の区別があることが、当たり前のように受け入れられている。第3章では、私たちの社会が数字に価値を置くようになった経緯を考える。第1章、第2章では客観性について考えたが、第3章と第4章は客観性と対を成している数値がテーマだ。念頭にあるのは、数値化は人間に何をもたらしたのかという問いだ。

OECDが行った学力テストで二〇〇〇年、二〇〇三年に読解力世界一となり、現在もつねに上位にいるフィンランドでは、学校間の序列はなく、学校のなかでも障害のある子どもとともに学ぶ仕組みとなっている。フィンランドの大学で教鞭きょうべんをとりながら子育てをしている社会学者の朴沙羅パクサラは次のように書いている。

以前、同僚のアーダに「フィンランドに、いわゆるいい学校ってあるんですか？」と質問したら「家から一番近い学校」と言われた。

名門校があるわけではなく、近所の学校こそが子どもにとってよい学校だというのだ。マイケル・ムーア監督のドキュメンタリー映画「世界侵略のススメ」(二〇一六)のなかで、ムーアがフィンランドの学校を訪れて先生たちとディスカッションしている場面でも、「家から一番近い学校が一番よい学校」という会話が展開されている。

フィンランドでは学校間の競争がないだけでなく、授業も詰め込みではない。子どもの興味に従ってテーマを設定して自分たちで調べ、あるいは体を動かすグループワークが中心であるという。小学校でも九〇分の授業枠のなかで自由に取組み、休み、自ら学んでいくのだ。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 総合人間科学部 心理学科

ある日、「下の子」クマのお迎えに行くと、「上の子」ユキの担任の MARIA 先生が園庭におられたので、しばらくユキの小学校生活について立ち話をした。私が「いやあ、話には聞いていたけど、ほんとまじ全然勉強しないんっすね! (中略)」と言ったところ、MARIA 先生は例によってとても真面目に「子どもの仕事は遊ぶことなのです」と答えた。「子どもが望まない技術を強制的に身につけさせるのはときにして要求が高すぎて、大人の満足にのみ結びつく危険があります」

「遊びを通して学ぶほうが、学ぶと思つて学ぶことより身につくときがあると私たちは考えています」
遊ぶことはそれ自体自発的な創造性を育む学びである。逆に勉強を強制されても子どもは伸びないというのだ。他にも、教育学者の福田誠治は、フィンランドの学校教育の特徴を次のように述べている。

第一に、一人ひとりを大切に作る平等な教育がなされている、まず、一六歳までは、選別をしない教育が実行されている。教育の基本は序列付けではなく、一人ひとりの発達を支援する教育である。さらに、社会にはどのルートを通つても、学ぶ気になれば誰もがいつでも学べる学校教育制度がつけられ、学習を保障する社会的なシステムが整えられつつあることである。

第二に、子どもが自ら学ぶことを教育の基本に据えている。競争などで学習を強制したりしない。あくまで、自らが学ぶことが基本である。したがって、子どもたちは授業の中であつても休む自由を与えられている。グループ学習、教え合いを大切にし、マイペースで学べるよう工夫されている。

誰もが平等に学ぶ機会があり、子どもは自分の興味に従つて自主的に学ぶとともに、競争や能力別のクラス分けなどもない。授業のなかで自由にグループを組んで学習をし、疲れたら各々勝手に休む映像を私も見たことがある。福田はフィンランド教育組合でのやりとりも紹介している。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 総合人間科学部 心理学科

「点数の高い高校に受験生が殺到するのではないか」

「それは、他人の点数だ（中略）しかも平均点だ。英語と数学の平均点を出して、何が出てくるのか。自分が何を学びたいかが重要だろう」

つまり良い偏差値の学校なるものが仮にあつたとしても、その「良い偏差値」は多数の人のデータからなる統計である以上、自分の成績とは関係がないものだといふのだ。しかも異なる教科を制約のあるペーパーテストで測つた平均値はそもそも意味がない。

偏差値ができた背景

日本の若者の多くは受験勉強を強いられ、偏差値を気にしているだろう。日本では長年にわたり偏差値によって学校は一直線にランク付けされ、受験生たちは模擬試験や本試験の結果に一喜一憂している。誰もが自由に学ぶ権利をもつはずなのに、学校にランク付けがあり、入学試験で排除することがあるということは奇妙でもある。

また、さまざまな研究分野をもつ大学が、なぜ「私立文系」「国立理系」といった雑なくくりのなかで序列がつけられるのだろうか。私たちはそれぞれ興味を持つことが異なり、そもそも興味や得意は、中学や高校で行われる教科からはみ出ることが多いだろう。

さらに大学に行つてからの多様な学びと研究は、高校までの画一的な教科とはまったく質が異なる。学生自身一人ひとりの願いは異なり、大学の学部の学びの多様さがあるなかで、偏差値という単純な数字を頼りにして序列化することで何が判断されてきたのだろうか。しかし、これほど当たり前のものでして受け止められているのは、数字の呪縛がそれだけ強いということでもある。

一九五七年に東京都港区の中学校教員だった桑田昭三が、学力偏差値を考案した。当初は教員の助に頼っていた進路指導に、信頼できる指標を導入することが目的だったのだが、次第に偏差値は独り歩きし、偏差値そのものが勉強の目的となつていく。例えば英語の学習は英語が使えるようになることではなく、英語のテストの偏差値が上がるのが目

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 総合人間科学部 心理学科

的となっている。偏差値そのものは、テストの点数が正規分布すると仮定される母集団のなかで、どの位置にいるのかを示す統計的な指標にすぎない。

本章では「偏差値で人の能力が測れるのか？」と批判したいだけでなく、そもそも「人間を数値化して比較すること^①で、私たちは一体何をしていることになるのだろうか？」と問いを立てたい。それは数値化・序列化がもたらすものを考えていくためである。

数値至上主義は偏差値に限った話ではない。社会に出たらあらゆる活動が数値で測られる。例えば大学教員である私は、毎年何本論文や著作を出版したのか、いくら助成金を獲得したのかを大学に報告する。業績の報告のあと、年度末に次年度の目標を立てて提出している。つまり目標と成果が数値で計測され評価されるのだ。民間企業に勤めている人たちは、もちろん私どころではない。

さらに、個人の問題だけではなく、学部としても次年度の数値目標を立て、年度末に達成状況を大学本部に報告する。大学全体でも同じデータ集めは行われており、各学部で作成させた六カ年ごとの中期計画のデータを集計して文部科学省へと報告して国からの評価を受けている。

つまり個人から組織、国家にいたるまで、子どもから大人にいたるまですべて数値で評価されている。数値に基づいて行動が計画・評価され、価値が決められるのだ。

2 統計がもつ力

エビデンスにもとづく医療

もちろん数値化されるのは人だけではない。自然と社会を含む森羅万象が一九世紀にいたって数値で測られるようになった。そして、この数値化は、統計学の支配という形を取ってきた。たとえば現在、医療の世界では「エビデンス（根拠）に基づく医療（EBM）」が絶対的な価値を持つ。これは統計学的に病態を分析し、統計学的に有効であると認められた治療法を選択するという営みだ。一九九一年にカナダの医師ゴードン・ガイアットが提唱した考え方である。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 総合人間科学部 心理学科

医療のエビデンスにはいくつかのグレードがある。もつとも確度の高いエビデンスは、患者を、ランダムに薬を投与する群と薬を投与しない群というように二つの群に分けて有効性を検討するランダム化比較試験（RCT）を、さらに複数比較し、メタ分析した結果である。RCTの根っこには統計的な妥当性の評価がある。統計的に検討された複数の試験を組み合わせることで、妥当性を上げていく。

エビデンスによって有効な診断方法や治療法が整備されるということには異論がないし、私自身もエビデンスにもとづく医療を選ぶ。しかし病の経験は、エビデンスにもとづく選択だけでは語り切れない。

再発がんが進行しているので「急に具合が悪くなる」可能性があるから、と緩和ケアを探すことを主治医から勧められた哲学者の宮野真生子は、エビデンスにもとづく医療において常に問題になるリスクについて次のように述べている。

リスクと可能性によって、「がんが再発した」私の人生はどんどん細分化されていきます。しかも、病と薬を巡るリスクはたくさんありますから、そのなかで、良くない可能性が人生の大半の可能性を占めるように感じ、何も起こらず「普通に生きてゆく」可能性はとて小きくなったような気がしています。（中略）

でも、このリスクと可能性をめぐる感覚はやっばりどこか変なのです。

おかしさの原因は、リスクの語りによって、人生が細分化されていくところにあります。そのとき患者は、いま自分の前にいくつもの分岐ルートが示されているように感じます。それぞれのルートに矢印で行き先が書かれていて、患者たちはリスクに基づいて良くないルートを避け、「普通に生きていける」ルートを選び、慎重に歩こうとします。

けれど、本当は分岐ルートのどれを選ぼうと、示す矢印の先にたどり着くかどうかはわからないのです。なぜなら、それぞれの分岐ルートが一本道であるはずがなく、どの分岐ルートもそこに入ってしまったら、また複数の分岐があるからです。

エビデンスによって有効とされる治療を選ぶプロセスには際限がない。病が進行していくプロセスのなかで、効果が出る確率が高い治療法が選ばれることが多いだろう。しかし確率が高いといっても「四〇%の人にはこの治療法が有効であった」という意味であり、残りの六〇%の患者には効かない。つねに数値をめぐって患者は「効かないかもしれない」

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 総合人間科学部 心理学科

と不安な状態に置かれることになる。宮野はこの手紙から半年ほどのちに四〇代前半で亡くなったが、エビデンスに基づくリスク計算に迫られてしまうと、人生の残り時間が確率と不安に支配されるものになってしまうだろう。

統計に支配される世界

科学哲学者のイアン・ハッキング（一九三六―）は、世界そのものが数学化したときに、世界は統計（確率）によって支配されることになったと書いていく。

世界が自然法則によって支配されているとみなす決定論的な自然科学の展開のなかで統計学は発達し、社会および人間は統計可能で予測可能なものとなっていく。

アメリカのゴールデンアワーのテレビでは、（中略）露骨な暴力シーンよりも、確率について語られることの方が多いのである。新聞をにぎわせる恐怖が、確率を使って繰り返し語られる。その可能性（偶然・確率）chanceがあるのは、メルトダウン、^総癌、強盗、地震、核の冬、エイズ、地球温暖化、その他である。恐怖の対象は（たぶん）これらではなくて、実は確率そのものである。（中略）

このような確率の支配は、世界そのものが数学化されたところでのみ起こり得たものである。我々は自然に対して、それがどんなものであり、またどんなものであるべきなのか、根底的には量的な感覚を持っている。これは当たり前なことではなく、いくつかのささいな理由もあつてたまたまそうなったのである。

統計学が力を持つ現状は、自然と社会のリアリティの在^あ処が具体的な出来事から、数字へと置き換わったことの象徴である。当初、統計は世界のリアリティについてのある程度の傾向を示す指標と見なされていたが、次第に統計が世界の法則そのものであると考えられるようになった。統計は事実に近い近似値ではなく事実そのものの位置を獲得するのだ。

先のハッキングはいう。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 総合人間科学部 心理学科

たとえば一九八八年、日本が遂に世界一の長寿国になったことが注目を集めた。我々は、ちょうど日本企業が投資のための可処分資本を世界一蓄積しているのと同じくらいリアルに、平均寿命の伸びを日本人の生活や文化の現実的な姿と感じてしまうのである。

このように、「平均寿命」という単なる数字が日本を構成する事実そのものとなる。一人ひとりの日本人は早く亡くなることも長寿のこともあるのだから、「世界一の長寿国」というラベルが個人の余命を説明するわけではない。ましてや一人ひとりの高齢者が具体的にどのような暮らしをしているのかを示すわけではない。独居なのか、病院で寝たきりなのか、認知症なのか、もしかしたら元気なのか、同じ九〇歳でもさまざまだろう。

リスクと責任にしばりつけられる

さきほどエビデンスに基づく医学が患者を追い詰める様子を、がん患者であった宮野真生子の言葉で確認した。宮野の場合は自分で自分の病にかかわるリスクを気にしてしまうことが問題だった。

医療現場においてのみ、リスクが息苦しさをもたらすわけではない。学校や会社といった組織、そして社会全体は、リスクを予防するという視点でメンバーの行動を決め、行動を管理し、しばりつけようとする。「そんなことしたら危ないよ」という注意を子どもの頃に受けたことがない人は少ないだろう。学校の生活はさまざまな校則でしぼられていることが多いが、これらは大人が外部からなにか非難を受けないために、生徒をあらかじめしばりつけるものである。子どものためと見せかけて、大人が自分の不安ゆえに子どもの行動を制限しようとしている。リスク計算は自分の身を守るために、他者をしばりつけるものなのだ。

そもそもリスク計算を重んじる社会が生まれる前提として、社会学者のウルリヒ・ベックは、経済活動における個人主義、自己責任論による支配の問題点を挙げています。現代人はコミュニティによつて守られることなく自分一人で自分の生活の維持に責任を負っているものであり、失敗があつても自分のせいなのだ。社会は個人を非難こそすれ守りはしない。自己の責任だけではない。「そんなことをして責任とれるんですか」という言葉を投げるときには他者を非難し、規範にしばりつけている。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 総合人間科学部 心理学科

個々人が責任ある行為者とみなされ、行為がもたらすネガティブな結果のリスクが計算される。さらには、そのリスクに責任を負うのは、国やコミュニティといった集団ではなく個人である。このような社会では、未来のリスクを見越して個人個人が備えることが、合理的な行動となる。

このことは、人は外から強制されるのではなく自ら進んで、社会規範にしたがっていく身振りにつながる。高校 生に規範意識を問うた大規模な調査でも、社会学者の平野孝典によると、現代の高校生は校則を守り、規則違反には憧れを持たないという結果が出た。

社会の実質が変化して「不確実でリスクに満ちた社会」になったというよりも、数値化されたことで社会や未来がリスクとして認識されるようになった。ともあれ、数値による予測が支配する社会、そして個人に責任が帰される社会は不安に満ちており、社会規範に従順になることこそが合理的なのだ。弱い立ち位置に置かれた人ほど、上からやってきた規範に従順になることでサバイブしようとするだろう。

次章では、こういった社会において、この弱い立場に置かれた人たちはどのように認識されるのかを見ていきたい。

出典 村上靖彦(著)

「客観性の落とし穴」筑摩書房 二〇二三年

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 総合人間科学部 心理学科

問一 傍線部①「『人間を数値化して比較することで、私たちは一体何をしていることになる

のだろうか?』」という問いに対する筆者の答えを六十字程度でまとめなさい。

問二 傍線部②「エビデンスに基づく医学が患者を追い詰める様子」について、本文に

基づいて百五十字以内で説明しなさい。

問三 さまざまな事象の「数値化」に対する本文の主張を批判した上で、本文の内容を踏まえ

て「数値化」することの意義を合わせて四百字以内で述べなさい。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 総合人間科学部 看護学科

課題：小論文

時間：60分

近年日本の在留外国人は増加傾向にあり、出入国在留管理庁によれば、令和5年（2023）末現在における在留外国人数は、341万992人となり、前年末に比べ、33万5,779人（10.9%）の増加がみられた。さらに、インバウンド人口もコロナ禍による減少は一時的であり、再び増加することが予測されている。

グローバル化が進む社会において、性別、年齢、人種や国籍、障がいの有無、性的指向、宗教、価値観などのダイバーシティ（多様性）の考え方が注目されています。多様な背景をもつ人々とともに生きる社会（共生社会）で、ダイバーシティ（多様性）を尊重することについて、具体例をあげて自己の考えを800字以内で述べなさい。

引用：出入国在留管理庁 HP https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00040.html

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 法学部 法律学科

課題：小論文（800 字）－社会と法に関する基礎的学力試験

時間：60 分

東京都知事選挙の選挙ポスター掲示板で候補者と無関係なポスターが大量に貼られる問題を取り上げた次ページ掲載の記事（読売新聞 2024 年 7 月 3 日朝刊）を読んで、次の二つの設問に合計 800 字以内で解答しなさい。

- ① 東京都知事選挙の選挙ポスター掲示板で候補者と無関係なポスターが大量に貼られる問題が生じた背景にはどのような事情があったか、新聞記事から読み取れる内容を整理して説明しなさい。

- ② この問題に対してどのように対応すべきか、あなたの考えを述べなさい。

入試種別： 海外就学経験者入学試験

学部学科： 法学部 法律学科

著作権の都合により、問題文は非公表となります。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 法学部 国際関係法学科

課題：小論文（800 字）－国際関係に関する基礎的学力試験

時間：60 分

以下の文章は、外国人への選挙権の付与に関するロバート・キャンベルさん（日本文学研究者）のインタビュー記事である。この文章を読んで【問題】に答えよ。

本業の研究者としての立場から言うと、日本国籍がないことで何か制約を受けたことはほぼありません。永住権があり、日常生活でしようと思うことは大体できます。

ただ、投票ができません。これまで学生を指導し、新聞やテレビで社会情勢の解説をし、ほぼ全ての省庁の有識者会議に関わってきました。未来をみんなと一緒に考えているのに、投票をせず、「責任を果たせていない」というじくじたる思いがあります。

それなら日本国籍を取ればいいと思われるかもしれませんが。でも僕は米国籍を持ち、日本で生きる者として言論に関わっている。米国籍を放棄する積極的な理由が見いだせません。法律的な次元では問えない、内心の問題です。

二重国籍は、外から人をどう迎え入れるかという、決して小さくない問題であり、多くの人が目を向けないのが不思議です。慎重に検証し、議論を醸成するべきです。

目が向けられないのは、二重国籍を認めないことによる損失が見えていないからでしょう。

もともと外国籍の人や一度日本国籍を放棄した人が、日本国籍を取得し、日本に拠点を設けて資産を移転させようとしても、外国籍を離脱するコストが高く、断念する場合があります。例えば米国は、国籍離脱税を支払わなければなりません。

海外で高等教育を受けたり、起業を考えたりする日本人の中には、外国籍を取得しないと必要な公的資金を得られないため、諦めざるをえない人もいます。

もっと扉を開けば、活動拠点を日本に設け、日本社会に100%コミット（関与）できる人が増えます。その人たちが海外で培った経験や知識、技術、資産、人脈は、日本の国益に資するはずで

世界の人材市場の中で、日本は負けています。昭和的な感覚では優秀な人材は集まりません。海外と行き来をしながら、日本に自分の拠点を作れるか。国として用意がないために、見えない人的な力やインフラが流出しています。

これは「開かなかった扉」の話ですから、日本がどのぐらい損をしたかに加えて、二重国籍を認めていたら得られたはずの「配当」もはっきりとした数字では見えません。でも、経営者や大学の運営者は分かっているはずで

日本では、外国籍の人の来日を「はるばる海を渡る」などと情緒的に表現します。その感覚がまだ残っている気がします。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 法学部 国際関係法学科

今の日本は「島国だから」では済まされない立ち位置にいます。世界の分断が鮮明になり、国際協調がますます重要になっています。一人ひとりの日本人が世界で活躍するためにも、積極的な制度設計を考えなければなりません。

【問題】 以下の問題について（１）（２）合わせて 800 字以内で記述せよ。

- （１）文章中下線部でいう「損失」とはどのようなものだろうか、文章の内容を踏まえて指摘しなさい。
- （２）外国人に対する選挙権の付与に抵抗感を持つ人々も日本には多い。その点も踏まえつつ、外国人に対する選挙権の付与に対してあなたの意見を述べなさい。

出典：朝日新聞 2023 年 7 月 12 日朝刊（「（ ）社会に関われない「損失」」）*一部省略した部分がある。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 経済学部 経済学科

課題：小論文

時間：60分

次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

育児休業取得率が高い国々のお父さんたちだって、日本のお父さんたち同様に、育休を取るとキャリアに悪影響があるのではないかという不安を抱えていました。彼らがこうした不安を克服していった経験は、日本でお父さんたちが育休を取りやすくする上で、とても参考になるはずですよ。

ここからは、ノルウェーのお父さんたちについての研究を解説し、どのような経緯で、現在のようにお父さんたちの育休取得が当たり前になったのか見ていきましょう。

実は、かつてのノルウェーにおいても、お父さんの育休取得は珍しいものでした。ノルウェーでは1977年から有休の育児休業を取得することが法律で認められていましたが、実際に育休を取るのお母さんばかりでした。しかし、1993年に男女の平等を進めようという観点から、法律で認められた育休42週のうち、4週はお父さんだけに割り当てられるようになりました。

普段の給料と同額の給付金が支払われたため、もしお父さんが取得しなければ、みすみす有給の育児休業を逃してしまうこととなります。しかし、こんなうまい話であっても、当初、ノルウェーのお父さんたちは育休取得に及び腰でした。

たしかに、この改革は、育休を取るお父さんを増やしました。改革前のお父さんの育休取得率はわずか3パーセントほどでしたが、改革直後には35パーセントに上昇しました。もちろん、日本のお父さんたちと比べると、この数字ははるかに大きいのですが、現代のノルウェーのお父さんと比べると半分程度の数字なのです。

この数字はノルウェー政府からすれば不十分なものでした。1995年の政府白書では、お父さんの間で育休取得が進まない理由を検討し、「父親たちは、会社や同僚から仕事に専念していないと見られることを心配しており、職場のこれまでのやり方と違ったことをすることに對する不安を抱いている」のではないかという考えに至りました。

(中略)

ノルウェーでも日本でも、お父さんたちは育休の取得に不安を抱えていました。しかしノルウェーでは、2006年時点で7割のお父さんが育休を取得するようになっているのです。

ノルウェーの例から、日本の社会が学べることは少なくなさそうだと思いますか。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 経済学部 経済学科

ノルウェーの経済学者たちは、どのようにお父さんたちの間で育児休業取得が広がっていたのか、そのプロセスを詳しく調べました。

彼らが注目したのは、同僚や兄弟といった近しい人が育児休業を取ったことが、お父さんの育児休業取得に及ぼす影響でした。

1993年の育児改革直後に育児休業を取ったのは一部の勇気あるお父さんたちでした。こうした勇気あるお父さんが、同僚あるいは兄弟にいた場合、育児休業取得率が11～15パーセントポイントも上昇したようです。一方で、義理の兄弟や近所の人から育児休業を取った場合には、育児休業取得に影響を与えませんでした。自分が育児休業を取るかどうかは、近しい人からは影響を受けるけど、あまり関係の強くない他人からは影響を受けないようです。

さらに興味深いことに、会社の上司が育児休業を取ったときの部下に与える影響は、同僚同士の影響よりも2.5倍も強いことがわかりました。やはり、上司が率先して育児休業を取ることで、部下も安心して育児休業を取ることができるようです。

周囲で育児休業を取った人がいない場合、最初に自分が育児休業を取るのにはなかなか勇気があるものです。育児休業を取ることで、上司や同僚に冷たい目で見られないか、昇進の機会を失ってしまうのではないかとといった心配が付きまといまいます。ノルウェーでは、育児休業を取ることで不利に扱われる事例は少なかったようですが、実際に何が起こるかは、育児休業を取ってみなければわからない部分があります。育児休業制度が変わることで、一部の「勇気ある」お父さんたちが育児休業を取り、彼らが不利に扱われないことを目にした同僚たちがそれに続く、といったメカニズムがここでは働いているようです。

この話を裏づける証拠として、公務員や労働組合が強い企業では、周囲で育児休業を取った人がいるかどうかは、人々の育児休業取得にあまり影響しないことが示されています。公務員や労働組合が強い企業では、労働者の立場が強く守られているため、育児休業を取ることで昇進に悪影響が及ぶのではないかと心配する人は比較的少ないと考えられます。こうした職場では、誰かが育児休業を取って、その人がその後、不利に扱われなかったことを確認しなくても、育児休業を取ることができます。

必ずしも労働者の立場が守られていない一般の企業では、誰かが育児休業を取って、その後、不利に扱われなかったことを周りの人々が確認することは大きな意味を持ちます。あとに続いて育児休業を取る人が一人、また一人と増えていくにつれて、育児休業を取ることで自分が不利に扱われることはないという確信の度合いを深めていくためです。こうした育児休業の連鎖とでも呼ぶべきプロセスを通じて、2006年にはお父さんの育児休業取得率が70パーセントに達しました。

出典：山口慎太郎（2019）「『家族の幸せ』の経済学 データ分析でわかった結婚、出産、子育ての真実」光文社新書、pp. 149-153

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 経済学部 経済学科

設問1 下線部のように結論付けている論拠を、本文中の言葉を使用して 300 字以内で説明しなさい。

設問2 日本男性の育休取得を推進するための施策を考え、その理由を含めて 300 字以内で説明しなさい。具体的な社会事象もしくは個人的な経験が含まれていることが望ましい。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 外国語学部 ドイツ語学科

課題：設問を含む小論文

時間：90分

次の文章をよく読んだ上で、問いに答えなさい。

いじめにかぎらず、今の日本ではさまざまな社会問題の解決を「心」に求める風潮がひじょうに強くなっているのはすでに述べたとおりですが、そうした傾向の中でも、私が最も不満に感じるのは、今の日本が抱えているさまざまな社会問題の原因や解決策を、「日本文化」や「日本人らしさ」に求める傾向です。

すなわち、「かつての日本人は正直者で、信義に厚く、モラルもあった。しかるに今どきの日本人は古きよき日本の心を忘れてしまっているために、いろんな問題が起きているのだ」と解説する人は少なくありません。

今の日本経済がけっして順風満帆でないのも、社会のモラルや秩序が乱れているのも、いじめや少子化問題が解決しないのも、すべてそうした「日本人らしさ」「日本の文化伝統」がなくなってしまったからだとはよく言われる話です。

こうした意見が保守的な立場から述べられたものだとするれば、いわゆる改革派の人たちはどういうふうにも今の日本の現状を考えているのでしょうか。

実は、改革の旗を掲げる人たちもまた「日本人らしさ」や「日本的な心」が問題だと考えているのです。

つまり「今の日本が問題を抱えているのは日本人が過去の伝統にしがみつき、島国根性から脱却できずにいるのが元凶なのだ」というわけです。こうした改革派の人たちにとっては、保守派の人たちが褒めそやす日本人特有の精神構造や日本文化こそが、日本の社会や経済がいつこうによくならない最大の原因で、もっと欧米人のようなメンタリティを持ち、グローバル化しないといけないというのです。

まったく立場を異にするはずの保守派、改革派のどちらから見ても、問題の焦点が「日本の文化」や「日本人らしい心」にあるという点で共通しているわけなのです。

そこで私の考えを述べさせてもらえば、実は何でもこうして「日本人らしさ」に結びつけて考える、その思考法自体が、今の日本の混迷を招いているのではないかと思っているのです。

では、なぜ現代日本が抱えている社会問題を「日本の文化伝統」や「日本人らしさ」と結び付けて考える議論がおかしいのでしょうか。

それはそもそも「日本人らしさ」という概念自体がどれだけ実体のあるものだろうか、私が疑っているからに他なりません

「日本人らしい心は本当に存在するのだろうか」なんてことを書けば、おそらく多くの方は「心理学者のくせして、何を馬鹿なことを言っているのか」と思うに違いありません。

たしかに、同じ状況に直面したとき、日本人とアメリカ人ではまったく違うモノの見方を

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 外国語学部 ドイツ語学科

したり、まったく異なる行動を選択することがあります。その違いが「日本人らしさ」であり、「アメリカ人らしさ」であると言えなくはありません。私が研究している心理学のジャーナルである「文化心理学」でも、そうした文化圏ごとで人間の考え方や感じ方がどのように異なっているかを研究するのが大きなテーマになっています。

しかし、そうした「らしさ」が、日米それぞれの文化伝統が産み出した、不変のものであると考えるのは、あまりにも乱暴な議論のように私には思えてならないのです。

一例を挙げて、考えてみましょう。「日本人は家族よりも会社を大切に作る企業人間だ」という話は日本でも、アメリカでも広く受け容れられているイメージです。今でこそ、だいぶ「アメリカナイズ」されたとはいえ、日本人は自分個人としての利益を犠牲にしても、集団全体の利益を優先する傾向があり、個人の価値観を優先するアメリカ人とは一八〇度違うのだという話はよく言われます。そして、そうした日本人のメンタリティは「聖徳太子以来、和の精神を重んじてきた日本独特の文化伝統」がもたらしたものだと言解されるのが普通です。

しかし、はたしてそうした解説は本当なのでしょうか？

---中略---

さて、話を元に戻せば、私たちは日本の文化伝統が「日本人らしさ」を作り出し、アメリカの文化伝統が「アメリカ人らしさ」を作り出していると考えがちです。

なるほど、たしかに行動だけを見れば、日本人はアメリカ人よりもずっと会社人間的であって、それが「日本人らしさ」の一部を構成しているように思えてしまいます。

しかし、それを細かく検証していけば、実は昔から日本人は集団主義的であったわけでもないし、本心から会社や藩を大事に思っているわけではありません。要するに、そうした「日本人らしさ」なるものは、実は日本の社会で生きていくための知恵、むずかしい言葉で言えば「戦略的行動」に過ぎないのではないかというのが私の考えであり、私が研究している「社会心理学」の考えであるのです。

つまり、日本人とアメリカ人の行動パターンの違いは、文化の違いがもたらしたもののというよりも、その人が置かれている「環境」、つまり社会のあり方がもたらしたものにすぎないというわけです。

実際、世界的に有名であった日本人の「会社人間」ぶりも、近年、終身雇用制や年功序列制が崩壊してしまうと、あっという間に昔話になった感があります。かつての日本では、いったん就職した会社を辞めて転職するのは不利なこととも思われていたのですが、今ではよりよい働き場所を求めての転職は当たり前のことになりましたし、また派遣社員やフリーターのような、従来になかった仕事のしかたも広がっています。

つまり、日本の社会という「環境」が変わることで、生きるうえでの「戦略的行動」も変わり、その結果、「日本人らしさ」のあり方も急速に変貌してきたというわけなのです。

(山岸俊男『日本の「安心」はなぜ、消えたのか 社会心理学から見た現代日本の問題点』集英社、2008年、46-52頁)

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 外国語学部 ドイツ語学科

問 1

上の文章を 400 字以内で要約しなさい。

問 2

日本人らしさや日本文化、ドイツ人らしさやドイツ文化はどのように形成されるのだろうか。
また、グローバル化が進む現代社会で「文化」はどのようなものになっていくのだろうか。
「本文の内容をよく吟味・検討した上で」、800 字以内で自分の考えを基礎付けなさい。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 外国語学部 フランス語学科

課題：小論文 (1400 字)

時間：60 分

次の文章を読み、設問に答えなさい。

公正と卓越性

教育社会学の基本用語に、①「公正」(equity)と「卓越性」(excellence)というものがある。この二つの概念は、ある教育システムのパフォーマンスを評価する際に用いられる。

まず、公正とは、「すべての子どもに十分な教育機会を提供し、適切な教育達成を保障できているか」という、教育の平等(equality)にかかわる概念である。一方卓越性とは、「すべての子どものポテンシャルを最大限に伸ばすことができているか」という、教育の質(quality)にかかわる概念である。

この定義から明らかなように、公正には、「教育機会をそろえる」という入口の側面と「教育達成を保障する」という出口の側面の両方があると考えることができる。同じように卓越性には、「すべての子どもを伸ばす」という水準上の側面と「トップ層を特に伸ばす」というエリート養成の側面という二側面があると想定できる。

この二つの概念と、学力保障・学力向上という二つの考え方の関連は明白であろう。すなわち、公正の原理を大切に考えるのが学力保障であり、卓越性の基準を重視するのが学力向上である。どちらが原理的に優れているという話ではない。両方の基準を高い水準で満たしているのが、優れた教育システムということになる。ただし、教育段階別に見た場合の、優先順位というものを考えることができる。すなわち、小中学校などの義務教育機関においては、やはり公正原理の方が優先されるべきであろう。誰一人、積み残したり、落ちこぼしたりすることがあってはならない。しかし大学等の高等教育機関になると、話は別である。そこでは当然、卓越性の基準が上回るべきである。なぜなら、大学という場所は、「最高学府」としての社会的地位をそもそも有しているからである。そこは、社会を引っ張っていく人々を育成する社会的使命を有している。

そして、本書で私がフォーカスを当てたいのは、小学校と中学校という義務教育機関である。「学力格差」が社会的に問題視されているのは、主として初等教育と呼ばれるその学校段階であり、その解決・改善がなければ、よりよい未来を構想することができないからである。

新自由主義的教育改革の広がり

ここ二〇年ほどの日本社会の状況の変化は著しい。その最大のキーワードが格差社会化であることはすでにふれた。そのもとで、テストレジームを現出させた「張本人」である新自由主義的改革への傾斜が日本の教育界で広がっている。新自由主義的改革の先駆けとなったのは、一九八〇年代半ばのイギリスのサッチャー保守党政権、アメリカのレ

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 外国語学部 フランス語学科

ーガン共和党政権だ。このアングロ・サクソン系の両国が、今日にいたるまで新自由主義的改革の先導役を果たしている。サッチャー・レーガンと同時代の政治家だったのが、二〇一九年に亡くなった中曽根康弘元首相である。中曽根氏は、一九八四年から八七年まで「戦後教育の総決算」をスローガンとする「臨時教育審議会」（以下、「臨教審」）を主宰したことで知られる。臨教審は、新自由主義的な傾きを濃厚に持つものであったが、その路線に沿って日本の教育が改革され始めたのは、一九九〇年代後半以降のことであった。サッチャー・レーガンから一〇年ほどのタイムラグを経て、日本にも新自由主義的改革の波が押し寄せることになったのだ。その改革のレトリックは、「個性重視」「教育の多様化」など口当たりのよいものであったが、その内実は、教育の現場に競争原理や成果主義を導入しようとするものであった。

新自由主義は、今日の世界の教育のトレンドとなっている。その根本の誘因は、各国政府の財政状況の逼迫ひつぱくである。戦後ある時期までのイギリスや北欧諸国では、社会保障制度の充実を目指す「大きな政府」が基本的スタンスであった。しかし、福祉国家論にもとづく政治のあり方では財政負担が大きすぎて、いずれの国でもそれがもたなくなつた。代わりに主流となつたのが、「選択と自己責任」を旨とし、「小さな政府」を標榜する新自由主義的な政治・経済運営のあり方である。日本も例外ではない。

教育の問題を考える際に、何よりも公正の原理を大事にしたいと思つている私のようなものには、②なぜ新自由主義的な政策がこれほど人々に「うける」のか、納得のいかないことも多い。しかしながら、全国学力テストしかり、学校選択制しかり、二〇〇〇年代に入り、新自由主義的な色彩を帯びた教育政策は着実に日本社会にも根を下ろしてきているようだ。それは、そうした政策オプションをよしとする人々が増えている、言葉を換えるなら、新自由主義的発想に適合的なメンタリテイをもつ人たちが増加しているからに他ならないと思われる。

ペアレントクラシー

「ペアレントクラシー」という言葉は、「家庭の富と保護者の教育的願望」が子どもの人生を左右する社会状態を表す言葉である。近代以前の社会は、「アリストクラシー」という言葉で表現される。人々の「身分や家柄が彼らの人生を決めていた」社会のことである。近代になり、社会は「メリトクラシー」の時代を迎えることになった。メリトクラシーとは、「能力と努力によって、個人の人生が切り拓かれていく」社会のことである。その中心に、学校教育制度が来ることは、誰の目にも明らかである。

現代でも基本的にはメリトクラシーの世の中だと言うことができるが、最近生まれ育つた家庭で子どもの「能力」に格差が生じるような状況が生じているし、家庭の違いが「努力できる子」と「努力できない子」の違いを生んでいるといった現状も見られるというわけである。なおかつ、日本の場合は、家庭における母親のプレゼンスが高く、父親の影は総体的に薄い。いわ

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 外国語学部 フランス語学科

ば「マザロクラシー (motherocracy)」とも呼べる状況が現出していると見ることもできるのである。

教育は誰のものか

私は数年前に、「教育は誰のものか―格差社会のなかの『学校選び』」というタイトルの論文を書いた。その論文の中心的主張は、現代の日本社会は、積極的に「学校を選ぶ層」と消極的に「教育を受ける層」へと二極分化しているのではないかというものである。

このまま手をこまねいているだけでは事態は決して改善しない。それどころか、新自由主義的政策を推進する国や地方の政策担当者も、「自らの子どもに少しでも有利な教育を」と考える「教育を選ぶ層」との利害の一致は、「教育を受ける層」の実質的な教育機会の削減をもたらしかねない。

憲法第二十六条では、「すべて国民は、法律の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する」と規定されている。問題は、③日本の教育が本当にすべての子どもたちの「教育を受ける権利」を十分に保障することができているかという点である。教育社会学におけるさまざまな研究が明らかにしてきたように、日本の学校システムは、その理念とはうらはらに、種々の社会集団を排除する機能を果たしてきた。その社会集団とは、たとえば同和地区の子どもたちであり、障害のある子どもたちであり、外国にルーツをもつ子どもたちであり、貧困家庭の子どもたちである。学校を排除の場から、包摂の場に転換させること。それが私たちの願いである。

志水宏吉(2020)『学力格差を克服する』ちくま新書、pp. 47-52. 一部改変

問一 傍線部①の「公正」と「卓越性」の概念を説明しなさい。(二〇〇字程度)

問二 傍線部②について、著者が「納得のいかないことも多い」と述べている理由を説明しなさい。(二〇〇字程度)

問三 「アリストクラシー」から「メリトクラシー」、さらに「メリトクラシー」から「ペアレントクラシー」社会への移行が起こっている理由を説明しなさい。(二〇〇字程度)

問四 傍線部③について、本文の内容を踏まえながら、具体例を交えてあなたの考えを述べなさい。(八〇〇字程度)

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 外国語学部 イスパニア語学科

課題：日本語の読解力と表現力

時間：60分

次の文章を読んで設問に答えなさい。答えはすべて解答用紙に書くこと。

普遍から通底へ

一八世紀、Le siècle des Lumières ①ケイモウ主義の時代、Universal (普遍) という言葉が生まれ、それが価値の尺度となった。光の世紀がその語を祝福していた。University という学の②デンドウの呼称もそれと呼応するものだ。世界は今日に至るまで、「普遍」という語を疑うことなき価値としてきた。だが、私の頭には忘れがたい二つの言葉がこびりついているのだ。

一つは、かつてユネスコでの同僚であり、モロッコに帰って「未来学」Futurologie という新しい学を提唱したマルティン・エルマンジャラがフランスのル・モンド紙に語った言葉、

「新世界秩序は死産児だった。我々がいかに努力しても〈文化的③ショウヘキ〉を越えられない。」

もう一つは日本の宗教学者、山折哲雄が朝日新聞に語った言葉、
「国際会議に行くと、そこには〈普遍〉という黄金の尺度が引かれていて、なかなかそれが越えられない。」

われわれも何気なく使っているこの「普遍」という言葉を考え直さねばならない、と私は気がついた。語源に (ア) 遡って考えてみよう。実は Universal とは Uni (一つ) verso (向かう) という意味を持つ形容詞である。すべてが一つの真理に向かう、それは素晴らしいことではないか？

だが問題はその一つがあらかじめ定められていることなのだ。普遍という時、その思考が向かうべきその一つとは〈論理的・男性的・西欧的〉というものなのだ。理性こそが至上の価値、というケイモウ思想が土台にある。一八世紀以来、この尺度によって Occident (West) 以外の諸文明は④ヤパンとされたのだ。なぜならアジア・アフリカ大陸で永らく生を営んできた多くの民族は、理性だけではなく、感性と⑤レイセイを併せて生きていたからである。理性だけを上位に置くのではない文化を生きてきた

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 外国語学部 イスパニア語学科

からだ。さらに「女子供」という言葉が人間 Man に及ばないものを指すものとして(註1)通用してきた。一九世紀、インドで生まれたイギリス人キプリングは「東は東、西は西、この兩者、相まみえることなからん」(East is East, and West is West, and never the two shall meet)と言つてのけたが、実は東西という地理的区分は当時でも(イ)曖昧で、厳密なものではなかった。普遍という分母を共有し今はEUとなったヨーロッパ(北米を含む)を West と呼ぶならば、「(1)」とはアジア大陸ではなく、また「東洋」という元朝以来の中華語が示すものでもなく、(その他)なのだ。West and the rest なのだ。だから西方の北アフリカ、マグレブ地方のイスラム圏も East に含まれる。つまり理性を至上の価値とし、科学技術を躍進させ、力の文明を築いた西欧と、その他大勢の神秘的ニヤパンな世界、ということだ。

この「普遍」という言葉では人類の明るい未来は開けない、と私は思うようになった。そして、思いを(ウ)巡らせるうち、到達したのが「通底」[Transversal]という言葉であった。

パリのユネスコ本部で文化部長を務め、幻想的美術に、また結晶の美に(エ)惹かれて行った思想家ロジェ・カイヨワが使った言葉に「Transversal」という語があった。この日本語訳が、中村雄一郎とも議論したのだが、「通底」である。

通底は、普遍とは異なり、まず他なるものの存在価値を認めることに始まる。異なるものを異なるままに尊び、しかもその底に響き合うものを認めることだ。私の敬愛する鶴見和子さんは私との対談で、その(オ)曼茶羅の思想を「異なるものが異なるままに、互いに助け合い、補い合いながら、共に生きる道」と定義してくれたが、それに通じる。

この「Transversal」のアプローチはすべての文明との対話を可能にする。二〇〇一年、異なった文化の存在の必要性を確認したユネスコによる「文化の多様性に関する世界宣言」にも通じる。【1】他者あってこそその自己なのだ。【2】もつともこの「世界宣言」の英語表記は、「一九四八年の「世界人権宣言」と同じく、未だに Universal Declaration なのだが……」

(注1) 原文は「ものして」となっていたが、明らかに脱字と考えられるため、「ものとして」としている(出題者)。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 外国語学部 イスパニア語学科

しかし、振り返れば既に二五〇〇年前、孔子は、その言葉を使わずとも既に「(2)」の思想を教えていたのではないか。「和して同ぜず」と。しかもそれが君子の立場であると。通底とはハーモニーであり、他者の否定ではない。「3」また折伏でもない。それに対し西欧に根付いた「(3)」のアプローチは「3」他文化に対する折伏であり、論語のいう小人のあり方「同じて和せず」である。

ローマ帝国は拡大した属州の民に寛大であったという。しかしその *Clementia* (お慈悲) とは上から目線の寛大さであり、その属州の民を対等に見るものではなかった。彼らが自分の文化を捨てローマへ同化することが一級のローマ市民になる道であった。

(出典：服部英二『地球倫理への旅路―力の文明から命の文明へ』北海道大学出版会、二〇二〇年、四十三〜四十六頁。)

設問 1 … 文中の傍線①から⑤のカタカナを文意に合致した漢字に直しなさい。

設問 2 … 文中の二重線(ア)から(オ)の漢字の読み仮名を書きなさい。

設問 3 … 文中の(1)から(3)の空欄「」に入るべき言葉を文中から一語ずつ抜き出しなさい。

設問 4 … 点線部【1】「他者あつてこそその自己なのだ。」とは、どういう意味か。本文で論じられている筆者の意図に即して五十字以内で説明しなさい。

設問 5 … 点線部【2】「もともと、この『世界宣言』の英語表記は、一九四八年の『世界人権宣言』と同じく、未だに *Universal Declaration* なのだが……」において、筆者がこの前文での議論との比較において批判的な指摘をしたのはなぜか。本文の内容から判断して八十字以内で説明しなさい。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 外国語学部 イスパニア語学科

設問 6 .. 点線部【3】にある、「折伏」とは何か。この文脈から想像されるこの概念の意味するところを四十字以内で述べなさい。

設問 7 .. 今日あなたが住む社会にある文化の多様性について、どのような考えや行為が、筆者が主張する「通底」の考えに合致するのか、具体的な事例をあげながら、あなたの考えを四〇〇字以内で論理的に述べなさい。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 外国語学部 ロシア語学科

課題：ロシア・ソ連についての基礎的知識を問う設問を含む小論文
時間：90分

I. 次の語句や人名などを各々50字以内で説明しなさい。括弧内に指示がある場合、それに従うこと。1～8まで番号を付し、所定の無地用紙に解答すること。

1. 「第三のローマ」
2. コサック
3. ニスタット条約（締結後の国際情勢にも触れること）
4. ドストエフスキー（代表作も挙げること）
5. ニヒリズム（関連する小説にも触れること）
6. チェーホフ（代表作も挙げること）
7. 「土地に関する布告」
8. 中距離核戦力全廃条約

II. 次の文章を読んで、下線部に関する設問に答えなさい。1)～3)まで番号を付し、所定の無地用紙に解答すること。

1. 露人は科学の民に非ずして芸術の人なり。プーシキン (1) が「我らの生まれしは真に感興のためなり、いみじき音響のためなり」と言いたりしは、露人を語りえて余地なきものに似たり。

1) この詩人が書いた作品名をひとつ以上挙げなさい。

2. シェレホフは露人としての千島の発見者にして、アラスカの発見者たり。牡獅子の如きエカチェリーナ二世 (2) の代に、かかる大探検者を出せるは必ずしも偶然ならざるべし。彼が発見したりし両土、一はこれを我と換え、他はこれを米に譲りて、また

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 外国語学部 ロシア語学科

長く彼が祖国のものたらず、しかしてイルクーツク (3) 市民、今彼の墓碑の所在を知るものだけに稀なり。

2) この女帝の時代にロシアで鎮圧された大きな農民反乱は何か。

3) この地を訪れ、帰国許可を得るためにエカチェリーナ二世に謁見した日本人漂流民の代表と、その人物を日本へ送り届けたロシア最初の日本公式使節の名を挙げなさい。

(出典： 大庭柯公『露国及び露人研究』、中公文庫、1984年、243、258 ページ【一部改変】)

Ⅲ. 外国語の文学作品を母国語に翻訳する際に獲得されるものと失われるものは何かを 200 字以内で説明しなさい。所定の横書罫目用紙の左上（罫目の外）に番号Ⅲを付し、解答すること。

Ⅳ. 大学で外国語を専攻する最も重要な意味について 800 字以内で述べなさい。所定の横書罫目用紙の左上（罫目の外）に番号Ⅳを付し、解答すること。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 外国語学部 ポルトガル語学科

課題：設問を含む小論文

時間：60分

次の文章を読み、それに関する後の設問に答えなさい。

教育への公的支援の拡充をめぐる議論が活発になっています。

A：() 政権は昨年、児童手当の拡充や多子世帯の大学授業料の無償化を盛り込んだ少子化対策を閣議決定。2022年の参院選では各党が幼児教育の無償化や、高校、大学の授業料減免などを掲げ、負担軽減策を競いました。B：() (OECD) の調査でも日本の教育への公的支出の少なさが報告されていますが、その流れに変化は起きるのでしょうか。

そんななか、大阪府は新年度から府民対象で所得制限のない高校授業料の無償化を始めます。

今後、年400億円近くの公費を投入し、26年度までに全員の無償化を実現させる計画。東京都も昨年12月に所得制限をなくす高校授業料の実質無償化を発表しましたが、都内私立の平均授業料を上回る額は保護者負担が残っており、都道府県での高校授業料の「完全」無償化は初となります。

これは昨年4月の府知事選で吉村洋文知事が掲げた肝いりの政策です。これまでの府の制度では、国の支援制度に上乗せし、私学では年収590万円未満の世帯などが無償化される一方、それ以上の年収では段階的に保護者の負担が増え、年収910万円以上は全額負担となっていました。

吉村氏は再選からわずか約1カ月後、制度の導入を発表。府在住の保護者からはあちこちで喜びの声を聞きました。「これで子ども2人分数百万円以上浮く!」とか、「わずかな年収差で十分な恩恵が受けられず、不公平だと思っていた」とか――。

ただこの制度、発表直後から、①大きな波紋を呼びます。

一つが、私学経営の圧迫です。

府では年収800万円未満の世帯を対象に、府が定める年60万円の標準授業料を超える額を学校側が負担する「キャップ制」を適用してきました。新制度で無償の生徒は倍増する見込みで、全体で約9・5億円あった私学側の負担も倍増すると指摘されていました。経営の圧迫は、教育の質の低下を招きかねません。私学団体も、保護者らの団体も制度案に猛反発しました。このキャップ制は東京の制度にはないものです。

また、居住地によって不公平が生じることも問題でした。

府の制度は府外に通う大阪の生徒も対象で、関西の私学にも制度への参加を呼びかけました。しかし、例えば兵庫県の私学に通う県民は負担があるのに、大阪の生徒は無償。参加すればキャップ制も適用され、標準授業料の超過分を大阪以外の生徒の授業料などで (a) 賄う こととなります。C：近隣5府県の私学団体は反発しました。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 外国語学部 ポルトガル語学科

結果、府は8月、標準授業料を3万円増の63万円などとする案を大阪の私学団体に提示。この金額なら私学側の負担額が従来より軽減されるとして合意します。しかし、近隣の私学は、灘（兵庫）や東大寺学園（奈良）、洛南（京都）など多くが希望せず、今年1月時点で希望校は約1割にとどまっています。

吉村氏は「どんな家庭に生まれても行きたい学校をめざせる」と意義を強調します。その理念自体には、私も賛成です。

ただ、府の行政や教育担当の記者たちの取材では、吉村氏の意向を受け、短期間で私学側から合意を得ようと（b）奔走する府幹部らの姿も浮かんでいました。最近、25年開催の大阪・関西万博への対応などで批判にもさらされる吉村氏ですが、大阪で基盤が強い地域政党・大阪維新の会の代表でもあり、大阪行政での政治力はとても強いです。

4カ月余りの駆け足で決定した今回の制度に、私たちは②大事な論点を見落としてはいないか。そう考えていました。

今年1月、立教大学の中澤渉教授（教育社会学）を訪ねました。著書「なぜ日本の公教育費は少ないのか」でサントリー学芸賞を受賞した中澤教授に、今回の無償化制度の評価を聞きたいと思ったからです。

中澤教授は「基本的には慎重な立場」と語ります。「金銭的には、子育て世帯にとっては負担が減るので歓迎だと思う」とした上で、府のキャップ制について「行政に意図がないとしても、私学への介入です。長期的には学校運営にじわじわ影響が出て、私学の独自教育が失われる可能性があります。負担がなくなるから良いんだと手放しでOKとはなりません」。

府外私学への参加の呼びかけにも「制度設計としてはありえない。（府在住にするため）住民票をどうかするとか、不正の温床になりかねない」と指摘します。

所得制限の撤廃にも懸念を語ります。「残酷な話ですが、子の偏差値と親の所得は相関が見られる。高所得者は所得税の累進課税で多く税金を払っているのはそうですが、では浮いたお金はどうするかと言えば貯金や、私的な教育に回すでしょう。教育格差の縮小を狙っているかもしれませんが、逆に格差が広がると思います」

また、授業料が無償でも入学金や教材費など諸費用はかかります。さらには、家族の世話や介護を担う「ヤングケアラー」や子どもの貧困の問題などを挙げ、そもそも学校に行けない人がいるとし、「生活が困窮する人には踏み込んだ給付の支援などの方が助かるのではないか」とも語ります。

特に気がかりなのは財源だと言います。府は財政健全化の取り組みを進めていますが、厳しい財政運営は変わりません。今年2月公表の中長期の粗い試算では少なくとも37年度まで最大940億円の収支不足が生じる恐れがあるとしています。「財源の問題があるからキャップ制も設けないといけなかったと思うんです。ただ、無償化を一度始めると有償化に戻すのは難しい。一過性ではなく、将来まで残る問題です。インフレなど先のことは見通せず、財源が厳しくなると、職員の人件費や教育内容など現場にしわ寄せが来る。この点は軽く考えてはいけません」

とはいえ、子どもの教育を公的に支える動きが出ることは、中澤教授も歓迎します。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 外国語学部 ポルトガル語学科

③教育は単に私的な利益ではなく、富を生み、民主主義的な社会の基盤を構築するもので、私たち全員が利益を享受できるとの考えだからです。ただし、社会保障費の増加など国の財源も極めて限られるなか、税負担のあり方をどうしていくのか。教育の意義を含めて、「政治家は説明をさぼっている」と話します。

府では2月21日から府議会が始まり、無償化を盛り込んだ新年度予算案が審議されます。吉村氏も「100%完璧じゃないかもしれない」と自ら語る制度の課題をどう持続可能なものとしていくのか。府議会は維新が過半数を占めますが、全国から注目される制度であり、将来世代のためにも議会での(c) 真摯な議論を望みます。

(出所) 池尻和生(ネットワーク報道本部次長)「アナザーノート 高校『完全無償化』の波紋 持続可能な支援へ 議論を」(朝日新聞2024年2月19日夕刊2ページ、東京本社)より抜粋。

設問 ※解答は別添の解答用紙に、かならず設問の番号とともに記入すること。

1. で囲われている(a)～(c)の漢字の読みをひらがなで書きなさい。
2. 下線部A～Cについて、以下の問いに答えなさい。
A: あてはまる人名を書きなさい。
B: OECDの正式名称を漢字で書きなさい。
C: 兵庫、奈良、京都、滋賀、和歌山をさすが、これに大阪を含めた6府県のほかに、近畿地方に属するとされている都道府県をひとつ書きなさい。
3. 二重下線部①について、本文の内容をもとに具体的に説明しなさい。理由も説明すること(200字以内)。
4. 二重下線部②について、本文の内容をもとに6つの論点をまとめなさい(300字以内)。
5. 二重下線部③について、以下の問いに答えなさい。
(1) 中澤教授はこの表現で何を評価しているか。20字以内で述べなさい。
(2) 「民主主義的な社会の基盤を構築する」ために必要であるとあなた自身が考えるものについて、教育以外の観点を含めた上で、具体的に論じなさい(350字以内)。

入試種別： 海外就学経験者入学試験
学部学科： 総合グローバル学部 総合グローバル学科

課題：小論文 (800 字)

時間：60 分

今日、非暴力的な抗議や抵抗を通して重要な社会課題の解決を目指す運動が世界各地で展開されている。これらの運動は「人口の 3・5 パーセントが参加すれば成功する」という説がある。これについて述べた以下の文章を読んで、問いに答えなさい。

覚えておいてほしい。人口の 3・5 パーセントを路上での運動に参加させられるほとんどの抵抗運動には、実際にはもっと広範な支持基盤があるのだ。すべての国民的危機に関する世論を確実に測定する方法はないが、3・5 パーセントくらい大きな割合の人口が積極的に公に姿を現す抵抗運動のほとんどは、圧倒的な人数の人びとの支持を得ている。1964 年および 1965 年にアメリカ公民権運動が成功裏に終わったことを考えてみてほしい。行進、座り込み、ボイコットや他の行動に積極的に参加したのはたった数十万人だった。けれども、大多数のアメリカ人はある種の包括的な公民権法が通ること望んでいた。ある目的を持った行動に出る上で人口の 3・5 パーセントを取り込むことができるということは、確実に、大多数の人びとがその目的を支持しているということだ。かなり大きな規模で抵抗参加者を路上に導き出せることは、おそらく、抵抗運動が人びとの支持を得ることの原因ではなく結果である。

もうひとつ覚えておいてほしいのは、3・5 パーセント・ルールはある出来事でもっとも盛り上がった時点を指しているが、技術としての抵抗運動がたった一度の出来事で大勢の人びとを路上に連れ出すことはめったにないということだ。ここで話しているのは、進行中で、よく組織された運動のことである。そうした運動は明確な目標を持ち、必要に応じてさまざまな戦術で戦い方を変える。

(出典) エリカ・チェノウェス『市民的抵抗—非暴力が社会を変える』小林綾子訳、白水社、2023 年、180～181 頁。

【問い】

もしこの説が正しいとしたら、①今日我々が直面している社会問題のうち（日本でも他の国でも良い）、抵抗運動や抗議運動によって改善や解決を目指すべき課題として具体的にどのようなものが挙げられるだろうか、また②それらの運動を担う人びとは、どのような手段や戦略をとれば 3・5 パーセントの人びとを動員することができるだろうか、実践的な観点から議論しなさい。